鉄道を利用するのと変らない。つまり野田市の交通位置は、東京との関係ではよい位置とは言えない。

しかしこれだけが野田市を東京の衛星都市としていないのではない。400年の歴史をもつ醤油工業が立地しているからである。都内まで転を求めなくとも、4,000人をかかえる大工業のあつたことである。交通位置と地元産業という2大因子によつて、野田市の性格が決定されていると言つても過言ではない。

丹那盆地を中心とした酪農経営

霜鳥　康子

伊豆半島の基部、東海道線「熱海」「函南」間の、丹那トンネル上に位置する。丹那盆地及びその北方の田代盆地を中心に、酪農経営について、主として、土地利用を中心に、その特色をつかむ事を調査目標とした。

○地域の概説

この地域の地形は、北方の箱根火山より古い洪積期成層火山たる、多賀、湯河原両火山の斜面が一つに連続した緩かな火山斜面で西に傾斜して、狩野川の平野に下つている。地形的特色としては、この開析された火山斜面のほゞ中央を、南北に丹那断層が通つており、顕著な断層地形の発達がみられさらに、この断層線に沿つて北より「田代」「丹那」両盆地をはじめ、本地域南方にも、いくつかの小盆地が存在することである。

交通不便な孤立的山間盆地として、最近に於ける近郊農村の急激な変貌をよそに、本地域では、農家率9割弱、専業農家4.5割という。純農村としての性格を強く残している。火山斜面であるから、東海地方としては、土地利用が非常に粗放的で、森林原野が広い面積を占め、水田は、盆地床と、狭い谷底に集中しており、その面積は少なく畑作を中心とした、酪農経営に依存している農家が多い。

○酪農経営について

本地域には、かつての幕府の天領である広大な駿河の牧が存在した。明治維新後、廃牧になつた牧を利用した。地主を中心とする牛馬産地帯として出発し、明治後半、酪農が始まつたもので、乳牛導入の時期としては、日本でも先進地の一つに数えられる。戦前までは原料乳供給地であると共に優秀な仔牛の産地として知られたが、最近では、搾乳中心に移行し、市乳の供給地となつている。その歴史的影響は、現在、飼料構造の点で、購入

濃厚飼料への依存度が高いことや、乳牛の飼育方法にも、その名残りが見られる。

かつて、酪農導入の前提となつた、広大な牧野は集落に近い所から、分割、開墾、植林の進行とともに縮少し、現在では地形的に部落から遠距離の山腹から山頂に至る急斜面に残るのみとなり、労働集約的な乳牛飼育の為の原野採草地としては、利用しがたく、酪農経営とは遊離した存在となり、ますます、林地に食いこまれている。かつ、最近では伊豆箱根を中心とするその周辺の観光開発に伴う観光道路、観光施設の進出により、原野はほとんど失われつつある。

乳牛飼育に欠くことのできない飼料作物は、原野の減少とともに、耕地に於ける青刈を中心とする飼料作物栽培に重点が置かれているが、乳牛飼養農家一戸平均耕地面積13.7反、そのうち畑が11.1反と、耕地面積には恵まれているにかかわらず、一般に飼料作物栽培面積の割合は低く、特に牧草栽培の普及が、非常に遅れている。このことは耕地と密接に結びついた、本来の意味での酪農を行つている農家は少ないといえる。

営農形態では、1.2頭飼育の副業的酪農から、専業的多頭飼育までみられるが、一般的には経営の主体は酪農ではあるが、その他に、自給用米麦蔬菜の一部商品化又は、製炭、製薪による山林収入に依存するという。営農形態が最も多い。乳牛頭数はかなり順調にのびており、専業的酪農へ移行する傾向はみられるが、今だ純然たる酪農地帯とはいえず農業酪農林業の併立する。いわゆる日本的酪農地帯であると考えられる。しかしごく最近に於ては、前に述べた原野の植林による採草地の減少に対して、集落に近い私有林の開墾による牧草畑化の計画が進められており、今後の酪農の発展を明るいものにしている。

本地域の、酪農地帯としての、地理的位置としては、山村に位置してはいるが、兼には東に熱海、湯河原、西に三島、沼津、吉原という中都市、及び伊豆半島の各消費地を控えている。古い厚史の上に、酪農地帯としての恵まれた地理的位置を良く利用して農協組織による市乳の自主生産を行つて、これらの消費地に、直接、市乳を分散供給していることが、本地域酪農の特色である。